

認知症治療に光明が見えたか

◆アミロイドβに対する抗体医薬品が認知機能の悪化を抑制

2019年10月、エーザイとバイオジェンは、共同で開発しているアルツハイマー型認知症（AD）治療薬アデュカヌマブを20年の早い時期にFDA（米国食品医薬品局）に承認申請する予定であると発表した。

実は、両社は19年3月にアデュカヌマブの治験を中止していた。治験をモニタしている独立判定委員会が、有効性が得られる見込みが薄いとして、中止を勧告したためだ。しかし、治験中止後に獲得したデータを合わせて、改めて解析してみると、アデュカヌマブの高用量投与群（10mg/kg）において、偽薬投与群に比べて、認知症症状の悪化が23%抑制されていた。異例の展開ではあるが、両社は、治験中止後に集まったデータに高用量投与群が多かったためとしている。

アデュカヌマブは、アミロイドβに対する抗体医薬品で、投与群の脳へのアミロイドβの沈着が偽薬群に比較して少ないことも確認されている。

◆中国でも認知症治療薬が承認、今後の研究の加速に期待

一方、中国でも認知症治療薬に関する進展があった。19年11月、中国の上海緑谷製薬は、同社のoligomannateが、中国の国家薬品监督管理局により、軽中度のADの認知機能改善薬として承認されたと発表した。oligomannateは投与開始後4週目で認知機能の改善効果を示し、9ヵ月目の治療終了時まで効果は持続した。上海緑谷製薬の研究者は、oligomannateが腸内細菌叢を調整し、細菌の代謝物の異常な増加を抑制することで、脳内におけるアミロイドβの蓄積を抑制、認知機能を改善したとしている。

日本では約500万人の認知症患者が存在し、その多くはADである。ADはアミロイドβの沈着による神経細胞死が原因と考えられていた（アミロイドβ仮説）。しかし、アミロイド仮説に基づく多くの開発薬が失敗に終わっていたため、疑いの目で見られていた。今回、アミロイドβ仮説が証明されたことの意義は大きく、より安価で効果の高い医薬品を目指して集中的な研究開発が進むだろう。20年は、認知症治療が大きく発展する年になることを期待したい。 【毛利光伸】